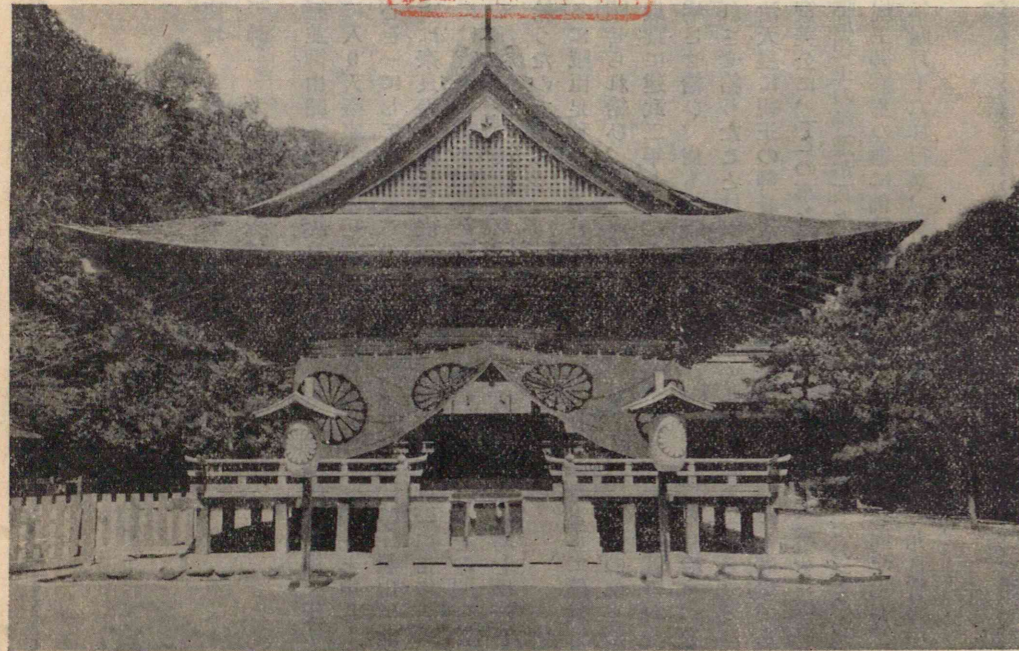


武相教育



昭和八年七月二十七日第三種郵便物認可
昭和十二年二月十五日發行(毎月十五日發行)



官幣中社鎌倉宮

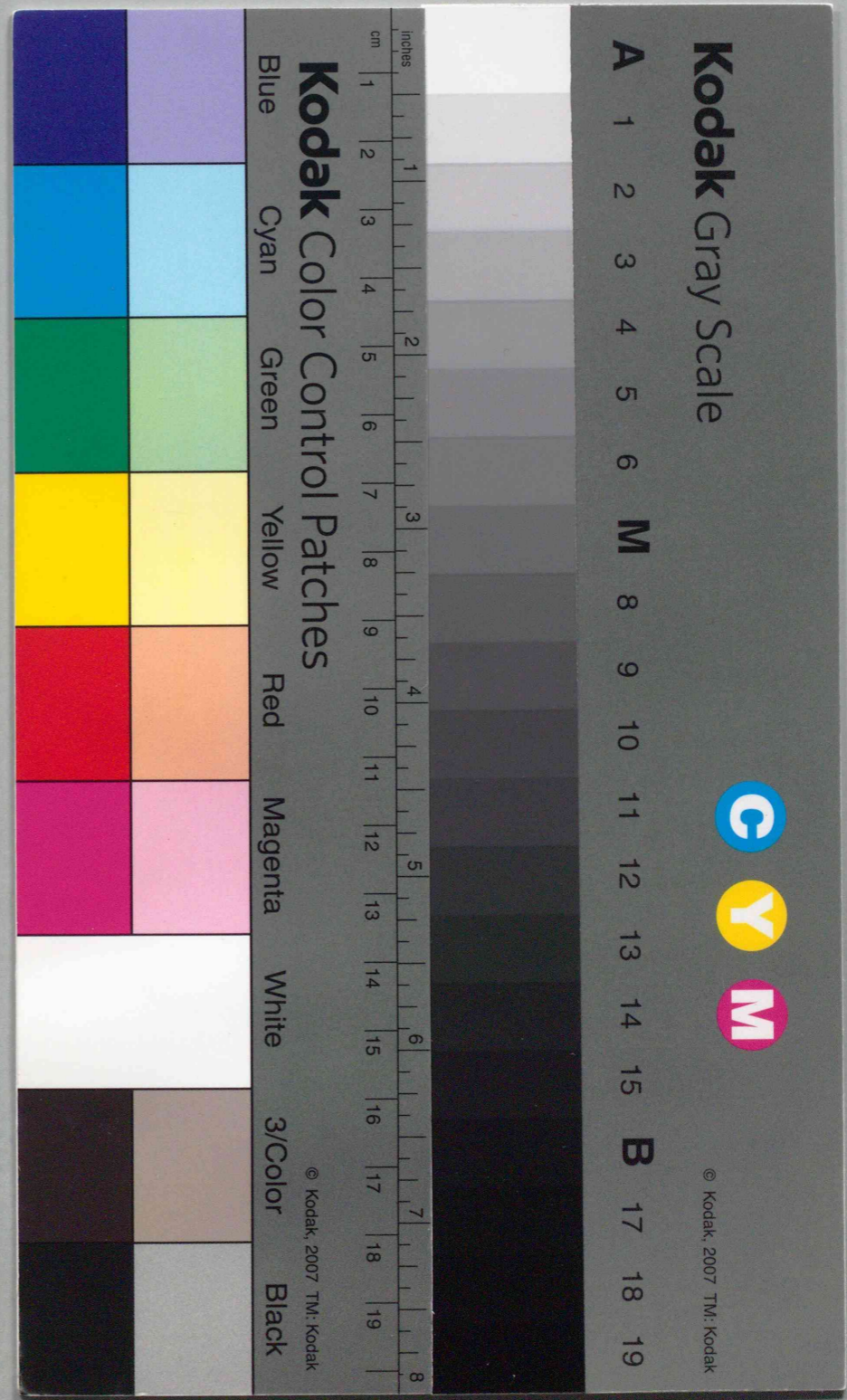
御勅題
田家雪

小學校中等學校學生兒童謹詠集

神奈川縣教育會

紀元二五九七年第八十三號

昭和二十二年二月十五日發行



官弊中社鎌倉宮

御鎮座地 鎌倉町二階堂

御祭神 大塔宮護良親王

御事歴並御由緒 大塔宮護良親王は長くも後醍醐天皇第三王子にましく、御年十一歳を以て御入室、後、延暦寺に入り天臺座主に任ぜられ給ひ御法名を尊雲法親王と申し上げた。かくして専ら文を修め、武を練り御父帝と御心を一にして王政復古の謀を廻し給ひ、元弘元年比叡山に北條氏討滅の軍を起させ給うたが利あらず、それより或は奈良の般若寺に虎口を遁れ、或は大和河内の山岳に討幕の秘策を講じ、又は十津川の山峽に重圍を脱し、後には吉野に城き錦旗を翻して王事に恪勤せられ、その間令旨を天下に傳へて志士の奮起を促し給うた。こゝに於て所在勤王の士は風を望んで起ち遂に逆臣化條高時を殲滅して世に所謂建武中興と稱する王政復古を成就せしめ給うたのである。

然るに賊臣足利高氏の奸策に遭ひ、捕はれの御身として建武元年十一月鎌倉に御下向、二階堂谷東光寺の土牢に幽閉せられ給ひ、翌二年中先代の亂に乗じて、直義その部下の淵部義博に命じて弑し奉らしめた。時に御年二十八歳實に建武二年七月二十三日であつた思へば金枝玉葉の御身にまじりながら櫛風沐雨十餘年偏に忠孝の大義を竭させ給ひ、尙も皇謨を翼けて宸襟を安んじ奉らせ給うべきに可惜春秋に富ませ給ふ御身を以て逆臣の毒刃に斃らせ給うたことは誠に痛はしくも畏き極みである。

明治天皇に親王の御最後がその功績に比し、如何にも悲惨であらせられたことを深く御追念遊ばされ、畏くも三條實美公に、「この事を憶ふ毎に、何時も歎歎して涙がこぼれる」と仰せられ、又明治維新の御偉業に對しては「護良親王の神靈が冥々の境から、只管翼賛せられたのであると思ふ」と詔らせ給ひ、明治二年勅命を以て神社を規王御終焉の地に創營せしめ給ひ、鎌倉宮と號し同年七月二十一日勅使参向して御鎮座の祀典を擧げられ、同六年四月十六日行幸、御親拜の御儀あり、同年六月九日官弊中社に列せられたのである。

御勅題 田家雪

謹詠集まへがき

日本國民は昔から大變に文學に秀でた國民であつて、僅か十七字でもつて俳句といふものを作つたり又三十一文字を五七七七七に口調よく並べて自分の思つて居ることをとても上手に言ひ表はします。是が和歌であることは云ふまでもない。和歌はその名の示す如く倭歌であつて日本獨特のものであります。

昔から現在まで詠まれた和歌はそれは、澤山あります、恐らく諸君も時に感じ折に觸れて歌を作らうといふ氣分に動かされたことが多々あるでせうこの歌を自分一人でなく二人或は三人或は五人十人と大勢で詠み合つて楽しむ催しがあります。これを歌會と云ひます。歌會は非常に古くから行はれて居つてそのやり方には色々ありますが、その中で最も嚴かに行はれてゐたのは宮中に於ける歌御會であつて、天皇陛下、皇后陛下の御前に皇族をはじめめ歌に堪能な重臣が之に待して吟詠するを聽し召されたのであります。徳川幕府の末には國が亂れてゐたので一時中絶の形となつて居たが、徳川慶喜公の大政奉還によつて明治親政の御代となるに及んで、同二年には早速と古例を復活して宮中御歌會始を行はせられることとなつたのであります。そして三年正月九日には太政官から御達が出て

御會始御題春來日暖被仰出候間勅任官並官華族各詠進可有之候
尤來廿四日辰半刻無遅々持參宮内省へ可差出
とある如く勅任官以上の詠進が定められたのであります、そして同五年には更に範圍を廣めて百官有司より詠進せしめられたので、國民の間にも非常に歌道にいそしむ者が多くなつて來たので、遂に七年からは一般臣民も詠進の光榮に浴す事が出来ることになりました。即ち同年一月の宮内省の御達しに
毎年一月御歌會始之節、官員華士族僧侶平民之無差別詠進之向は採録之上、叙覽に相供候條、勝手次第詠進之上、各管廳へ可差出候、此旨布達候事
但御題御會日等之儀は、毎年歲首可及布達候事

とあつて、此の年の御勅題は「迎年言志」といふのであります。それから年を逐ふて詠進者の數を増して、明治、大正、昭和と七十年を経過した今日に於いては實に全國からの詠進歌數萬に及ぶといふ華やかさとなつて來ました。今明治の初年から本年までの御勅題を擧げて諸君の御参考に供す事とする。

- | | | | |
|------|-------|------|-------|
| 明治二年 | 春風來海上 | 二十八年 | 寄海祝 |
| 三年 | 春來日暖 | 二十九年 | 寄山祝 |
| 四年 | 貴賤迎春 | 三十年 | 松影映水 |
| 五年 | 風光日々新 | 三十一年 | 新年雪 |
| 六年 | 新年祝道 | 三十二年 | 田家煙 |
| 七年 | 迎新年言志 | 三十三年 | 松上鶴 |
| 八年 | 都鄙迎年 | 三十四年 | 雪中竹 |
| 九年 | 新年望山 | 三十五年 | 新年梅 |
| 十年 | 松不改色 | 三十六年 | 新年海 |
| 十一年 | 驚人新年語 | 三十七年 | 巖上松 |
| 十二年 | 新年祝言 | 三十八年 | 新年山 |
| 十三年 | 庭上鶴順 | 三十九年 | 新年河 |
| 十四年 | 竹有佳色 | 四十年 | 新年松 |
| 十五年 | 河水久澄 | 四十一年 | 社頭松 |
| 十六年 | 四海清 | 四十二年 | 雪中松 |
| 十七年 | 晴天、鶴 | 四十三年 | 新年雪 |
| 十八年 | 雪中早梅 | 四十四年 | 寒月照梅花 |
| 十九年 | 綠竹年久 | 四十五年 | 松上鶴 |
| 二十年 | 池水靜浪 | 大正二年 | 宮中製 |
| 二十一年 | 雪埋松 | 三年 | 社頭杉 |
| 二十二年 | 水石契久 | 四年 | 宮中製 |
| 二十三年 | 寄國祝 | 五年 | 寄國祝 |
| 二十四年 | 社頭祈世 | 六年 | 遠山雪 |
| 二十五年 | 日出山 | 七年 | 海邊松 |
| 二十六年 | 巖上龜 | 八年 | 朝晴雪 |
| 二十七年 | 梅花先春 | 九年 | 田家早梅 |

十年 社頭、曉
 十一年 旭光照波
 十二年 曉、山雲
 十三年 新年言志
 十四年 山色連天
 十五年 河水清
 昭和二年 海上風靜 (宮中喪)
 三年 山色新

而して本年の御勅題は御承知の如く田家雪であり、今東京朝日及び日新聞の記事に據つて歌御會始の御儀の模様を伺ふに、

宮中歌會始の御儀

新春御恒例の歌御會始は二十六日午前十時から鳳凰ノ間において平安の古を偲ぶ雅やかなうちにも新春を壽ぎ嚴かに行はせられた、奉仕の諸員、特に陪聽差許された林法相、建部逕吾博士、一宮みさを女史等御儀の間に參進、御待申上げるうちに、天皇、皇后兩陛下には高松宮、同妃兩殿下、李鍵公妃殿下を隨へさせられて出御遊ばされた。

讀師山縣有道公は恭しく披講の床に進み、次いで講師冷泉爲系伯は民草の詠進歌四萬一千四百九十六首より選ばれた東北農村の人、秋田縣仙北郡南楢岡村伊藤文治氏等七氏の氏名及び選歌を披講發聲の大原重明伯以下が朗吟し雅趣豊かな空氣は御儀の間にみち溢れ各皇族殿下の御歌は一度、皇太后陛下並に皇后陛下の御歌は三度御披講申上げ

終つて山縣讀師は謹みて、天皇陛下の御前に進み御製を認め給うた御懷紙を拜受復床して御視蓋の上におき講師に示す、發聲の大原伯は「みゆきふる...」とひとときは聲高らかに朗吟申上げ、講師の諸員は第二句より感激もひとしほに和唱、五度嚴かに頌し奉りこゝに晴れやかな御儀は十一時半すぎ御終了になつた。

御製

みゆきふる畑のむきふにおり立ちていそしむ民をおもひこそやれ

皇后宮御歌

この秋もみのりよからむをやまたのさとましろにそゆきのふりける

皇太后宮御歌

里人のいさみきほひて新米を納めしくらにゆきそつもれる

雅仁親王妃勅一等 勢 津 子
 海軍少佐大勳位 宣仁親王
 宣仁親王妃勅一等 喜 久 子
 故依仁親王妃勅一等 周 子
 博恭王妃勅一等 經 子
 博義王妃勅一等 朝 子
 恒憲王妃勅一等 敏 子
 故邦彦王妃勅一等 侃 子
 朝融王妃勅一等 知 子 女 王
 守正王妃勅一等 伊 都 子
 神宮祭主大勳位 多 嘉 王
 多嘉王妃勅一等 靜 子
 聰彦王妃勅一等 聰 子 内親王
 故恒久王妃勅一等 昌 子 内親王
 恒徳王妃勅二等 光 子
 春仁王妃勅一等 直 子

この日頃雪にこもらむみちのくの田つらのさとのなつかしくして
 こもすたれかくる伏屋もいなくらも雪にうもれて春やまつらむ
 こゝろよりのとかにとしやむかふらむ雪に明けたる小田のさと人
 しつかやの庭もまかきもうつもれてたゞ雪しろき小山田のさと
 紅にそらはほのく明けそめてゆきにかゝやくちまちたの里
 はてもなきひろ野となりぬ麥はたもたふせのいほも雪のうつみで
 はつゆきの晴れしあしたにみわたせばけふりたつたりをやまたのさと
 けさ見ればふりつむゆきに小山田のいほの軒端のおもけなるかな
 ふりつもるゆきのひかりに夜はあけて鶏かねきよきをやまたのさと
 行きすきしくるまのあともうつもれて雪ふりしきる小山田のさと
 あたらしき依をつみて親と子とゑみつゝそ見る小田のしらゆき
 さらゆきにふりこめられて田人らはかたりあふらし秋のみのりを
 こそのちり清むることし田も畑もたゞひとり雪のつもりで
 わらふきのふせやつゝきに雪つみて田の面もあせも見えわかぬかな
 清らかに田つらのやなみふりかくすゆきしつかにも夜はあけにけり
 とよとしのよろこひいまたさめはてぬ山田のいほにゆきそつもれる

李王垣妃勅一等 方 子 女 王
 李鍵公妃勅二等 誠 子
 李鍋公妃勅二等 贊 珠 子

うなみらかあそへるにはも雪にしてものしつかなるをやまたの里
 いなつかもふりかくされてむらすゝめあさりなやまむ雪のあしたは
 しつはみなとしのみのりをかたるらむ雪のあしたをゐろりかこみて
 雪ふかき小田のふせやのもちの木のみやあさるらむひえとりのなく
 ことしまたみのりゆたけきさかならむやまも田つらもゆきふかくして

題者 掌典長兼御歌所長正三位勳三等公爵 臣 藤原朝臣公輝上
 正四位勳四等公爵 臣 源朝臣有道上
 正四位勳四等公爵 臣 源朝臣有道上
 御歌所寄人從四位勳四等 臣 平朝臣胤明上
 御歌所寄人從四位勳四等 臣 藤原朝臣幸次上
 御歌所寄人從四位勳四等 臣 藤原朝臣重行上
 御歌所寄人從四位勳四等 臣 藤原朝臣重季上
 御歌所寄人從四位勳四等 臣 藤原朝臣重光上
 御歌所寄人從四位勳四等 臣 藤原朝臣重隆上
 御歌所寄人從四位勳四等 臣 藤原朝臣重隆上

うなみらかあそへるにはも雪にしてものしつかなるをやまたの里
 いなつかもふりかくされてむらすゝめあさりなやまむ雪のあしたは
 しつはみなとしのみのりをかたるらむ雪のあしたをゐろりかこみて
 雪ふかき小田のふせやのもちの木のみやあさるらむひえとりのなく
 ことしまたみのりゆたけきさかならむやまも田つらもゆきふかくして
 題者 掌典長兼御歌所長正三位勳三等公爵 臣 藤原朝臣公輝上
 正四位勳四等公爵 臣 源朝臣有道上
 正四位勳四等公爵 臣 源朝臣有道上
 御歌所寄人從四位勳四等 臣 平朝臣胤明上
 御歌所寄人從四位勳四等 臣 藤原朝臣幸次上
 御歌所寄人從四位勳四等 臣 藤原朝臣重行上
 御歌所寄人從四位勳四等 臣 藤原朝臣重季上
 御歌所寄人從四位勳四等 臣 藤原朝臣重光上
 御歌所寄人從四位勳四等 臣 藤原朝臣重隆上
 御歌所寄人從四位勳四等 臣 藤原朝臣重隆上

召歌

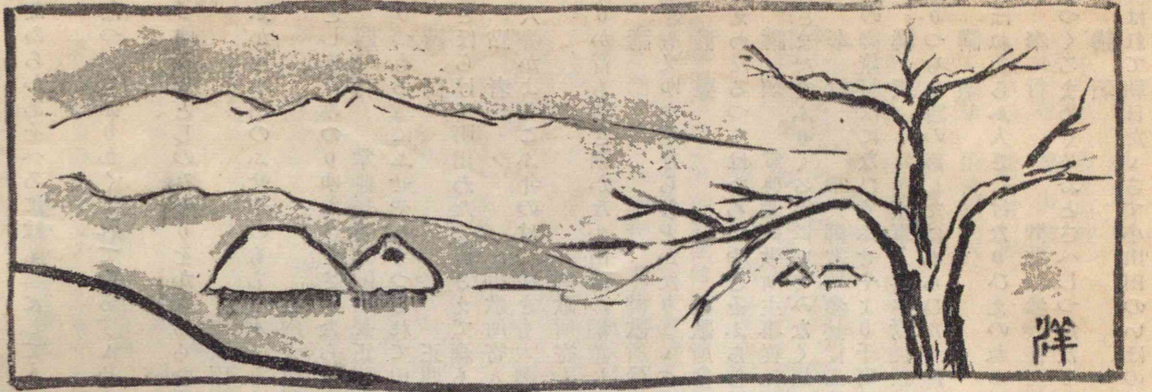
御歌所寄人從四位勳六等 臣 菅原朝臣又次郎上
 夕食する田つらの庵に灯ともりて暖かけにもつもる雪かな
 御歌所寄人從五位勳五等 臣 源朝臣英一上
 さとひとは雪はこひきてなかしけりあひるのあそふかとの田かはに
 御歌所寄人從五位 臣 平朝臣元臣上
 山とほきかつしか小田ははりの木と草屋とありて雪おもしろ
 御歌所寄人從五位勳五等 臣 源朝臣義清上
 こゑあけてたひとはいはふたから田のおほみだの雪もかくやと
 御歌所寄人從六位 臣 藤原朝臣且正上
 家人かせとの板井に通ひにしあとこそ見ゆれ小田のおほゆき

選歌

秋田縣仙北郡南楢岡村正七位勳七等 伊藤文治上
 大雪にそりひく人も立ちよりてわら火をかこむ小田の一つ家
 大阪市東淀川區十三南之町三の四 佐中精一上
 鳴子引き逐ひし雀のねくらさへ思ひやれる、夜はの雪かな
 鎌倉町大町六四一 小津たみ上
 ぬま水のひかりもさむき葛飾の田つらのさとに雪はふりつゝ
 三重縣河藝郡玉垣村字柳村三番屋敷 島 明上
 冬やすみ里にかへりてしつかにもひろき田の面の雪をみるかな
 愛知縣中島郡祖父江町中牧 海田五百都上
 さえくれし伊吹おろしに尾はり田のたゐの家むら雪そつもれる
 愛知縣中島郡平和村大字六輪字東前平七二の二 角田ともゑ上
 うふすなの神にまうつる道のみは雪にあとあり小山田のさと
 福岡縣八幡市大藏六九六 上田三郎上
 松明をとりておりたつ鋤きそめのうしろのせしるくたまる雪かな

聖慮畏き極み

千葉胤明氏謹話
 畏き御製を拜し御歌會始御終了後點者千葉胤明氏は謹んで語る
 謹みて、田家雪の御題に就て申せば神ながらの道を津々浦々迄教へこめと
 いふ明治天皇の御製を御承遊ばされて國家の大本たる農事御獎勵
 のために畏くも陛下御親しく御苑内の御田におり立たせ給うて農家の勞
 苦を御實験遊ばす御體験から農家の御一番に苦しむ時期の雪中の事を思召
 されて賜つた御事である様に拜察する、御製は千萬無量の御感想を骨身も
 凍る大雪の中に立つて姿をふむ一農夫の上に集めさせられておよみ遊ばさ
 れた事を深く恐察せねばならぬ、以上は臣民に對せられる御事ばかりであ
 るが陛下におかせられては昨今はこの嚴寒中にもかゝはせられず終夜御寢
 も遊ばさぬ程の御苦勞ともれ承る事を肝に銘じて上下を通じ拜察せねば相
 すまぬと存じ上げます。



勅題 田 家 雪

本誌に寄せられた謹詠の數々は、詠進こそしなかつたが、縣下兒童生徒の代表作とも云ふべき優秀作である是は單に登載せられた兒童生徒の榮譽であるばかりでなく國民精神涵養の上にも好果を齎らすであらうことを信じて廣く供覽に呈する次第であります。

男子中等學校 (受付順)

物皆は足らはぬ賤が家なれど心ゆたかに雪を見るかな
 稻むらに一夜つみにし白雪の今朝をうらゝに四方に照り映ゆ
 むら雀轉る音にも初春の天津日匂ふ雪の草屋根
 雪深き里の伏屋に初日さし大空高く煙たなびく
 ふる雪に子等はひそまる圍爐裏ばた遠く戈執る兄偲びつゝ
 降りつみし田家の雪もみなはれて初日輝く東雲の空
 賤が家の雪に埋れし軒端にも輝き立てる日の御旗かな

女子中等學校

豐年のしるしのみ雪ふりつみて里わの家ゆひるしつかなり
 いへへはましろきゆきにつゝまれて倭らうつおとは何處よりする
 わらはへも翁も出てゝもろともをろかむ今朝のゆきの初日子
 小山田の雪間に梅の匂ひ來て春の心にまかせつゝ羽根
 しつのは春のみゆきにわけそめてのきはなひく日の丸の旗
 こそよりもみのり豊かになりあとの稲田の株に降れる初雪
 大君の御威稜田の面に銀のみのり壽ぐ民くさの家
 稲束をゆたかに積みしこの宵に静かに雪のおときこゆなり
 豊なる年のしるしとふりつもる田沿の家の軒の白雪
 喜びの光もたらしはつ春のひはおし照れり田舎の雪
 降る雪にわらやの圍爐裏赤くもえてまると樂しく豊年を祝ふ

(挿圖は横濱高女
平田洋子氏筆)

- 湘南中學 二C 高田 三太
- 相原農蠶 蠶四 高下 幸男
- 横濱二中 五 唐木 正氣
- 吉田島農林 二 石川 信司
- 商工實習 商一 谷田部 敏夫
- 自修校 二E 柳川 榮
- 神師本科 二ノ四 山口 浦助
- 横須賀實業 家政 川崎 喜美子
- 伊勢原高女 三 上原 春子
- 女子師範 三 西村 トミ
- 御所見實科 三 高橋 俊子
- 小田原高女 四 久保寺 春江
- 横濱高女 四 朝長 純子
- 横須賀實業 本一 小山 靜枝
- 戸塚實科 四 松本 みどり
- 平塚實踐女 三 曾我 民子
- 秦野高女 四 山口 富久
- 新名高女 本四 井上 みね



降りつもる雪に埋みし村里に日の丸の旗あかゝ立てり
 小山田の帷は明けて鶏の鳴く静けき年の雪の朝かな
 白妙の雪に埋れし賤ヶ家も安けき春に國旗立つ見ゆ
 冬山のまろきをおほふしろたへのゆきにひとすぢ紫のけむり
 遠ちの山こちの田の面も降りつめて雪に明るき茅屋なりけり

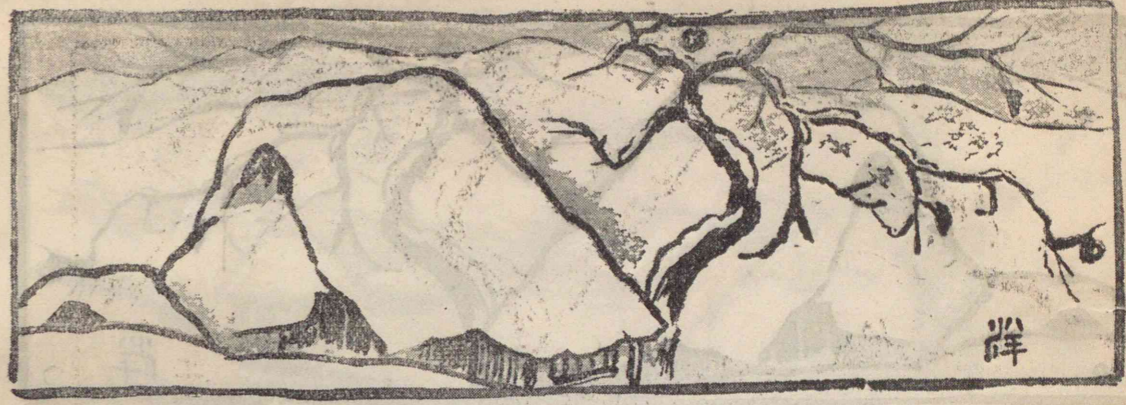
青年學校

昨夜から降り續きしやあの雪も今朝の朝日に輝く田家
 わらぶきの屋根をうづめし雪白し人の心の姿に似たるも
 圍爐火をかこむ親子のむづましとほ深し雪降る夜は
 青々と空は晴れたりよき日より速く浮き立つ富士のよろしき
 田の面の解け初めにける雪中に麥青く伸び山家明るき
 静けさの粉雪やみ日本晴朝日にふるひ起つ竹むらを見つ
 稔りしとよるこびあふる秋もすぎ田の面は見へず雪のあけぼの
 入相の鐘の遠近なりひびく平和な里に雪降りしきる
 この秋のみのり豊けきささかな門田につもる今朝の白雪
 さらくと降り行く雪はいとまなく冬の田家の寒き夕暮
 降りつみし雪は霽れたり田の家にゆたけくのぼる朝のけむりの
 賤が家も恵みの雪にいろとられ昇る初日に照りはゆるなり
 積む雪の軒にからみて煙立つ伏屋伏屋の朝あけにけり
 鶏舎廣く白く光りて山の家雪くづる音に鶏は寄り合ふ

横濱市内小學校

雪ふかき山田のはてにくつきりと日の丸の旗たてし家見ゆ
 人も來ぬ山里の家に音もなく雪降りにけり新春の朝
 軍人出でし伏家を聖世の眞白き雪は深くつゝめり
 ひとところ緑の麥をのぞかせて背戸の畠の初雪の朝

- 瀨谷 本二 原 勢 治
- 向丘女 本二 杉田 久美子
- 宮城野 本一 梅津 竹造
- 生田 研一 關 延
- 三保 五 高橋 義照
- 菁莪 本四 大川 祥雄
- 菁莪 本二 柏木 トシ子
- 山北 二部一 池田 久男
- 小田原第一 研 正井 正晴
- 中里 本三 高橋 時成
- 上溝 本四 北島 嘉雄
- 大野 研 佐藤 兵治
- 長井 本一 高橋 みね子
- 長井 本一 熱田 俊夫
- 市場尋高 尋六 鷲見 千里
- 西戸部尋高 高一 土屋 改造
- 旭尋高 高二 高瀬 秀夫
- 石川尋高 高二 平野 利男



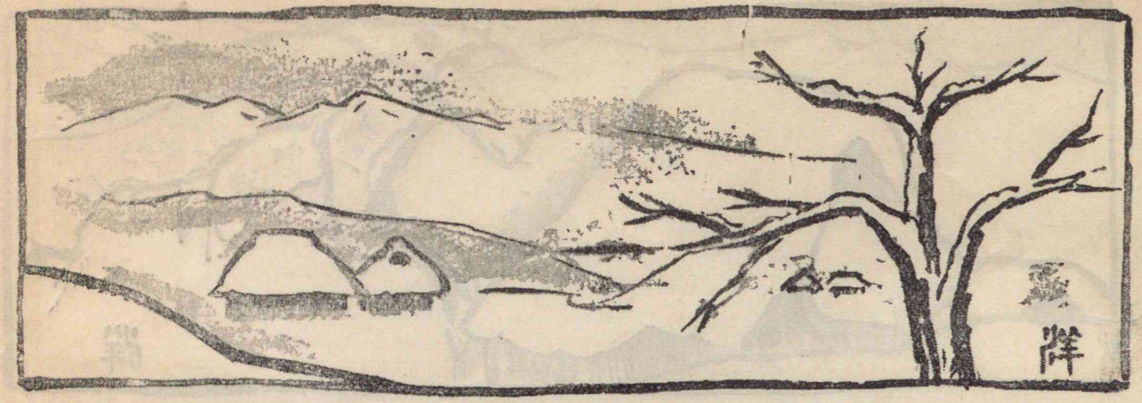
村里の屋根に積れる雪こそは清き心の君にたとへん
 散り敷ける庭の落葉の埋れて山の田家に初雪を降る
 雪晴れの小田のたまやにひとすぢの煙ゆたかに立ちのほりけり
 大雪のふりてしづけき村里にどこか餅つく音のするなり
 かやぶきの田家の屋根に豊年のきざしも見えて積る白雪
 おともなく野山は雪に明けゆきてわら家わら家に祝ふ御代かな
 晴れわたる空の光もさわやかに野邊の草家に雪ぞかどやく
 野も山も銀こめし曉に雞鳴きて旗ひるがへる
 初日の出をがみし心神々し田舎の家の雪のあしたに
 元日や影は見えねど勇ましく雪の中にぞ雞の鳴く
 常盤木も藁屋も雪に埋れて朝日輝く大八洲國
 野も山も白く埋めし雪やみて我が物顔にほゝ白の鳴く
 雪ふりて馬屋のまへのかひばをけ白くうづもれ初日かけさす
 山里のわら家に雪のふりつみてことりことりと水車のおと
 田も畑も雪白妙に明けぬれば藁屋にのぼる煙長閑けき
 田も家も眞白の雪におほはれてくひなの聲に初日かどやく
 豊かにもつもりし雪に田舎家のあさげのつどひ樂しかるらん
 田もはたも道もわからぬ雪の朝かすかに聞ゆ雞の聲
 梅ヶ枝の合間に見ゆる田舎家の後に白き竹の雪かな

横須賀小學校

里の家も田の面も雪に埋れて今うらゝかに初日のほりぬ
 田舎家のたのしき門の松竹にさらゝと降る清き雪かな
 初春や梅二三りんほころびて國旗ひらく雪の田舎家
 しづがやの庭にほころぶ紅梅にやさしくかほる初春の雪

平塚市内小學校

- | | | |
|-------|-----|-------|
| 末吉尋 | 六男 | 安齋義信 |
| 女子師範附 | 高二 | 大木絢子 |
| 西前尋高 | 六 | 長尾登志代 |
| 青木尋 | 六 | 植栗秀樹 |
| 豊岡尋 | 六 | 稻葉敬 |
| 城郷尋高 | 高二男 | 向共茂 |
| 濱町尋 | 六 | 積田亨 |
| 同 | 六 | 角井宏 |
| 南太田 | 高二 | 高木ヨシ |
| 金澤尋高 | 尋六 | 小林さつき |
| 壽尋高 | 高二 | 中村秀之助 |
| 杉田尋高 | 高二男 | 鹿島長十郎 |
| 同 | 高一女 | 椎橋富士枝 |
| 同 | 高二女 | 永野明子 |
| 大鳥尋高 | 尋五 | 布川淑子 |
| 神橋 | 尋五 | 渡邊清 |
| 幸ヶ谷尋高 | 高六 | 太田伊佐子 |
| 東臺尋 | 尋四 | 坪田英三 |
| 吉田尋高 | 高二 | 三木文子 |
| 諏訪尋高 | 高一 | 後藤シズエ |
| 澤山尋 | 尋六 | 水島嘉津子 |
| 田戸尋 | 尋六 | 瀧口靜江 |
| 浦郷尋高 | 高一 | 石渡イネ |



たか山もひろ野も雪におほはれてしづが家とほく二つ三つ見ゆ
 松しげる岡より見れば野邊遠く雪の彼方にうるむ灯火
 野も山も苦屋も銀の衣着て清らかな春おとづれにけり
 明け初めし藁屋の軒に舞ひ集ふ雀の落す雪しづきかな
 豊年の雪に明け行く村里の静けき様や御代の春なり
 降りつもる雪の中より煙たつわらやのくらしのしかるらん
 野も山も雪深くして賤ヶ家のわら打つ音もかすかにきこゆ
 降り續き積れる雪も今朝霽れて田家に見ゆる日の丸の旗

川崎市内小學校

郡下小學校

村里に燈火見ゆる夕暮にいつしか雪は降り始めたり
 豊年と老も若きもともゝに喜び勇む田舎やの雪
 初日の出わらやの屋根にさし出で、雪とけそむる元日の朝
 すゝめなく田家の朝は明けそめて初日に光る雪のさやけき
 足ひきの山家の庭の白雪にかほりもゆかし紅梅の花
 初春の聲も間もなき田舎家の屋根に重たし豊年の雪
 いなぶらにつむ白雪や朝日てる八千代となきてすゝめとびけり
 雪の朝南天の木にふんわりと綿ぼしかり日に輝けり
 雪ふりてのどかに暮すしづがやの君のめぐみを祝ひ尊ぶ
 朝日かけ賤の藁家にかぎろいて雪の晴れたる里の静けさ
 なごりなく晴れてぞよき日鳥取りと童いでたつ雪の田圃へ
 山雀追はれ來りて藁屋根の雪を散らして喜び合へり
 降りつもる雪は草屋を白妙にうづめてぬくし依つむ里
 音もなく屋根より垣へ雀とぶ雪の朝の山の邊の家

- | | | | |
|-------|----|-------|---|
| 平塚第四 | 尋五 | 松伊藤 | 理 |
| 平塚第二 | 尋六 | 田中 | 實 |
| 平塚第一 | 尋六 | 朝長千鶴子 | |
| 平塚高等 | 高一 | 杉山 | 洋 |
| 御幸尋高 | | 越川總子 | |
| 櫻本尋 | 尋六 | 永野ヒサ子 | |
| 宮前 | 尋六 | 宮川雅子 | |
| 川崎高 | 高二 | 砂川富士子 | |
| 大野尋高 | 高二 | 水村八郎 | |
| 向丘尋高 | 尋五 | 松本チヅ | |
| 高坂尋 | 尋六 | 長島信次 | |
| 高坂尋 | 尋五 | 石田妙子 | |
| 綾瀬尋高 | 高一 | 山田朝 | |
| 腰越尋高 | 高一 | 三橋春子 | |
| 走水尋 | 尋三 | 渡邊善昭 | |
| 瀬谷尋高 | 尋五 | 川口京子 | |
| 小田原第二 | 高二 | 中野キミ | |
| 相川尋高 | 高二 | 石井盛造 | |
| 藤澤高 | 高二 | 稻葉一夫 | |
| 足柄尋高 | 尋五 | 瀬戸孝子 | |
| 日吉尋高 | 高二 | 加藤サト | |
| 都岡尋高 | 高二 | 榎本政義 | |

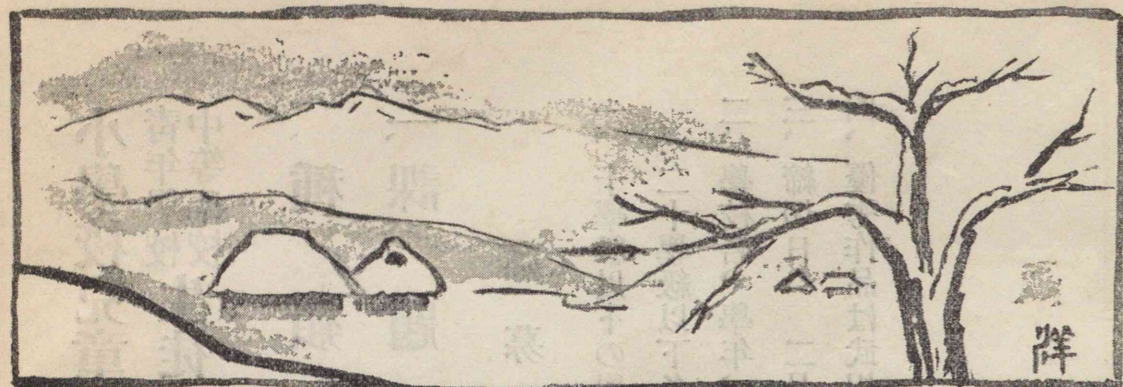


降

雪降れる山家の朝は静かなり雀のさえずる聲のなきはし
野も如も雪に埋れり賤が家の爐邊にぎはし秋のみのりに
しろがねの重きを積みし藁屋にも朝餉の煙のぼるたのしさ
豊作のしるしなるかな畑のにも麥の芽残し雪はふりけり
谷あひの藁家も木々も雪はれてきんざら／＼と朝日さすなり
雪の夜は静かに明けて一すぢにはるかか家に入營の旗
門の田の雪のゆたけき賤家に立てる昭和の光榮かゆく
野も里もひとしくつゝむ白雪に庭端の南天色さえて見ゆ
家毎に立つ門松に降りつみし雪ははれたり小山田の春
あばら家の軒の雀の留守の巢をそつとつゝんだ屋根の雪かな
しろがねの雪に埋れる田舎家の日に輝けり新年の朝
元日の晴れたる朝の雪景色野中の家も喜びみちる
大雪に雨戸もかたき賤が家に煙細くも立ちのぼりけり
白雪の藁屋に深く積りつゝ御代は豊かに年立ちにけり
初雪のしきりに積る田舎家に松雀飛び来て鳴きさわぎ居る
雪積る夕静けき里の家に藁打つ音の高くひびける
小野の端の山のふもとに一人立つ賤家の屋根につもる白雪
明方の雞鳴きて雪深きしづがふせやに煙ほの見ゆ
さしのぼる初日まばゆく輝ける雪の苦家のけむり豊かに
雪の上に朝日がさしてわら屋根も前の田圃も白くかがやく
ひななやの庭あたゝかく敷藁の新しき上にむらぎえの雪
家まばら野は廣々し我が里の雪のあしたの朝ぼらけかな
新しき俵を積みて團樂なす軒端の雪もゆたかなりけり
豊かなる年のしるしの雪つみて賤の家々輝きゆくも
雞の聲もしづかに聞え来て草屋／＼につもる白雪
降りつもる雪をかいたる道ありてたどりて行けばわら家なりけり

- | | | |
|-------|----|-------|
| 三保尋 | 尋六 | 湯川誠一 |
| 川村尋高 | 高二 | 瀬戸英雄 |
| 開成尋高 | 高二 | 草柳初江 |
| 厚木尋高 | 高一 | 村治一江 |
| 小出尋高 | 高一 | 大竹滿 |
| 松田尋高 | 高二 | 府川清子 |
| 名倉尋高 | 高二 | 杉本静子 |
| 善我尋高 | 高二 | 内山利一 |
| 中津尋高 | 高二 | 萩原保雄 |
| 大磯尋高 | 尋五 | 山本博造 |
| 新磯尋高 | 高一 | 荒井ソヨ子 |
| 櫻井尋高 | 高二 | 劍持貞子 |
| 宮城野尋高 | 高二 | 勝俣實 |
| 大根尋高 | 高二 | 北村武次 |
| 初聲尋高 | 尋六 | 田中平八郎 |
| 依知尋高 | 尋五 | 白井浪子 |
| 神師附屬 | 尋六 | 坂正紀 |
| 鎌倉第二 | 尋五 | 白木美智子 |
| 谷本尋高 | 高一 | 村田ふみ子 |
| 上溝尋高 | 尋五 | 桐生幸恵 |
| 鶴嶺尋高 | 高二 | 木下孝夫 |
| 國府尋高 | 高二 | 松本スマ |
| 久里濱尋高 | 高二 | 山崎クミ |
| 早川尋高 | 高二 | 日下部芳郎 |
| 義胤尋高 | 尋五 | 中山道子 |
| 中和田尋高 | 高一 | 天笠喜一 |

昭和十二年二月十五日
昭和十二年二月十五日
昭和十二年二月十五日



降

山裾の家みな雪に埋もれてさやかに見ゆる日の丸の旗
見るたびに昔をしのぶ田舎家の草家をうづむ春の白雪
遠近に緑も映えて面白く雪のあしたの山あひの家
刈りとりしわらにてふきし大屋根に雪ぞつもりておもたげに見ゆ
いつまでも降り続く雪今日も亦田家にともる灯も底冷えて
かけわらに雪ぞ積りて静かなる家よりも／＼ほ／＼えみの聲
降れる雪何時しかやみて空晴れぬ朝日にはゆるる里の家々
初日の出生氣満ちたり賤が家の軒端に仰く嶺の白雪
雪やんでわらやの軒にひら／＼と光りきらめく日の丸の旗
賤が家の煙の出口三日月に残りてつもる里の大雪
雪の布見事にはつた田の上に鉄を入れては春まつ農夫

其 他

見るかぎりしろがね色の山里に小鳥群れとぶ朝ぼらけ哉
小庭邊にふり積りたる白雪に日の照り映へて子等の遊べる
淡雪の積れる松の下根にはやぶかうじの實あかくかしづく
炭作るかまの煙の棚びきて我里和む雪景色かな
風寒むみ子を負ひつれて人妻の里訪ね來る春の淡雪
降る雪にまろびながらも愛し子は教への道を忘れざりけり
賤が家の戸洩れの吹雪寒けれどほど火を圍む親子安けし
日の丸の御旗ひらめく山里の賤家の家屋に雪ゆたかなり

一白千山聳碧穹南村北里雪玲瓏園家斟酒昇平日送舊迎新銀屋中
松樹堆銀瑞霧中早梅冒雪綻南叢噠々茅舍炊煙簇正是天恩普不窮
六花埋巷陌。一白曉光妍。隴麥如鋪玉籬梅似挂絳。碎氷挑美菜。踏雪汲寒泉喜此豐年瑞遙懷朔北天
山の端も田の面もなべて白妙の雪にみのりの瑞兆かくして

- | | | |
|--------|----|-------|
| 大野第二尋高 | 高二 | 山田千代子 |
| 御所見尋高 | 尋六 | 椎野芳治 |
| 南下浦尋高 | 高二 | 松原伊津子 |
| 鶴沼尋 | 尋四 | 鈴木美佐子 |
| 長井尋高 | 高一 | 龍崎アヤ子 |
| 片瀬尋高 | 高二 | 銚木孝 |
| 半原尋高 | 高二 | 井上哲次 |
| 比々多尋高 | 高二 | 長島實 |
| 小田原第一 | 尋五 | 内田雪子 |
| 東秦野尋高 | 高二 | 關野精一 |
| 田名尋高 | 高一 | 志村秀子 |

牧郷代表 小山華雲

録 倉 東門育人
縣立商工實習學校與風會同人
武 内 廣 吉
坪 井 良 之 助
座 間 美 都 治
編 輯 子

小學校兒童 青年學校 中等學校 生徒

作品募集

- 一、種 類 和歌。俳句。童謠。
- 二、課 題 紀元節。雛祭。

應募規定

- 一、十學級以下の學校は和歌、俳句、童謠各一點宛
二十學級以下各二點宛、二十一學級以上各三點宛の割
- 二、學校名、學年、氏名明記の事
- 三、締切日 二月末日
- 四、優秀作品は武相教育誌上に發表す

神奈川縣教育會
武相教育編輯部

昭和八年七月二十七日第三種郵便物認可
昭和十二年二月十五日發行(毎月十五日發行) 第八十三號

廣告料金(原稿ノ切は毎月五日)

普通	一頁 拾圓	半頁 五圓
表紙	四分ノ一頁 參圓	
表紙	一頁 拾五圓	

連續掲載の場合は特別割引す

價 定		
一冊	拾 錢	郵稅五厘
半ケ年	五十 錢	郵稅共
一ケ年	壹 圓	

昭和十二年二月十五日印刷
昭和十二年二月十五日發行

神奈川縣高野郡藤澤町大倉二九二
神奈川縣教育會代表者
發行所 櫻 井 諭
編輯人 櫻 井 諭
印刷所 鈴木 清 五
印刷所 横濱 活版 會
發行所 神奈川縣教育會